

文学史の条件

- ギュスターヴ・ランソン試論 -

1

一枚の肖像写真、それが問題なのだと言うべきだろうか。あるいはそれこそが、--つまりその映像が誰かを撮影した「一枚の肖像写真」として特定され、同定されること自体が--、問われるべきなのではなかったか。

いずれにせよ、その白黒写真じたいは、一見したところ、何の変哲もない記念写真か何かのように見える(1)。写っているのは椅子に腰かけた老人と、そのかたわらに立った壮年の男だ。椅子のほうの老人は、山高帽をかぶり、山羊のような顎髭をたくわえて、微かにほほえんでいるようでもあるが、分厚い眼鏡のせいでその表情はもうひとつはっきりしない。ただ、襟もとに輝いている大きな勲章らしきものからすると、どうやら彼は老練な将軍か大佐といったところらしい。

ところで、その写真を見る者の目をまず引き留めるのは、この老将軍が膝にかかえている、いささか彼の職業にふさわしからぬ品物である。それは仔犬の型をした玩具で、その四つの足の部分にはそれぞれ車輪がついているのだ。もしこの手押し車が戦場での彼の愛馬だとすると、彼が勲章を授かった戦いというのは、もしかして子供らのうち興じる遊戯としての戦争だったのではなからうか。そういえば、柊の葉に似たその勲章もどこかしら作りものめいているし、彼の身体つきもどちらかというとな青年のように華奢に見えないこともない。

同じようないかがわしさは老将軍の隣の人物にも漂っている。こちらの人物は口髭をはやし、縞のマフラーに大きなマントをはおって、威厳ありげに目を上げている。だが、異様に太く引かれた彼の眉や、目のまわりの隈どりは、どう見ても芝居か何かのための仮装である。しかも、かりにそれが芝居だとすれば、本格的な演劇の扮装というよりは、座興のための素人寸劇のそれに近い。そして、そのような彼らの扮装がいかがわしいというのは、素顔を隠さねばならない彼ら自身が胡散臭いからではなく、他人の目を欺いて別の人物のふりをしようとする変装への意志が晴れやかなまでに放棄されているからである。

とはいえ、少なくとも、この写真から彼らの素顔をうかがい知ることは困難である。ましてや、彼らのうちの一人が、後に二十世紀フランスの哲学・文学の領域における最大の巨人となる人物だと見分けることなど、たとえその作家の名前をあらかじめ告げられていたとしても、やはり不可能な要請であるだろう。少しでもその領域に親しんだことのある読者なら、その作家の代表作とされる小説が、公園で植物の根茎を目にしたとき嘔吐をもよおさせるに至る現存在の露呈をめぐる物語だということを知らされれば、彼の名前はたやすく思い浮かぶはずであるし、また、その代表作の本文である日記を書いたとされる主人公の名前とて同様である。

もっとも、かりにこの作者が、写真のなかの仮装のように、いくぶんは主人公

の青年の姿を借りているとしても、彼らの名前を同列に論じることについては、今日までにかなり議論を経ているので、無条件な同一視はさすがに回避されている。少なくともそのためには、たとえば慎重に伝記的な文脈を再構成しつつ、「私はロカンタンであった」(2)という作家本人の言葉をそこに引用するといった作業が必要とされるだろう。だが、それらの名前を連結する淡い等式のあいだに中間態として挿入されたまま、文学史から忘却されてきた第三の人物が存在していることをここで想起しておかねばなるまい。

この第三の透明な人物の印象が薄いのは、この人物には名前と言える名前も、顔と見なせる顔も与えられてはいないからであろう。にもかかわらず、この人物が作者と主人公の間に存在していなければならないのは、この媒介者がいるおかげで初めて読者は問題の日記を目にすることができるからである。それはなぜかと言えば、かつての仮装者でもある作者が、この日記が自分と異なる人物によって書かれ、さらにまた別の人物によって編集・出版されるという設定のほうを好んだからである。言い換えるなら、ここでの作者は、そうした二重のパラテキスト的な構造をもつ小説の作者に成ろうとすることによって、自らの文学的経歴を開始させるという実存的な選択を敢行したわけである。

編集者という普通名詞によって指示されるこの第三者のプロフィールに関しては、われわれには、日記の書き手である「ロカンタン」や、彼が図書館で出会う「独学者」に関するよりも、遥かにわずかな情報しか提供されていない。日記の本文に先立つ「編集者の序」Avertissement des éditeurs において、その語り手

である編集者は、自らを指示するとき、一貫して「われわれ」という一人称の複数形を使い、「序」の題名にも、末尾に記された署名にも、「Les éditeurs」という複数形を選んでいる(3)。この序文だけでは、それゆえ、この「編集者」がじつは単独の存在なのか、それとも文字通り複数の存在なのかを断言することはできないし、その性別を知ることにもまたまならない。なるほど、このような複数形の使用は、一般に« pluriel de modestie » と称される謙譲の用法にすぎないとしてしまえば問題はない。それは編集者の慎み深さ、公平無私な性格、その仕事の信頼性を印象づける装置なのだ。だが、ここで興味深いのは、日記の实在を保証しているとされるこの客観的な証人が、書物の十分の一にも満たない冒頭で、ぶつりとテキストのうえから消えてしまっていることである(4)。彼の最後の作業の痕跡は、日記の本文の冒頭からほんの少し進んだ頁に付けられた脚注である。その個所から先のいかなる頁を探しても、この編集者がテキストに介入した形跡はいっさい認められない。ということは、この編集者の活躍の舞台は、作品全体の入り口に限定されていることになる。これはどういうことなのか。

たしかに、このような編集者の領分の制限に関しては、より常識的な視点から物語論的な解釈をあてはめることもできはしよう。つまり、この虚構の編集者は、あくまで日記の物語のなかへ読者をすみやかに導入するための装置であり、それゆえ物語の中盤以降は読者と伴走する義務を持たない、という解釈である。この導入装置の働きは、読者に予備的な情報を供給し、日記の实在感を高めることに存しており、読解が軌道にのってしまえば、その機能が停止するのも当然の事態のように見える。その限りでは、誰もこの編集者の職務を遂行ぶりをけなしたりできないだろう。なにしろ「編集者の序」によれば、彼は反故のなかから発

見された手稿の書き手を特定し、日付のない紙片にはその執筆時期を推定してやったうえで、手稿全体の前後関係でしかるべきと思われる位置にそれを配置し、その書き手が執筆時期に前後して中央ヨーロッパ・北アフリカ旅行から帰国して、三年間をブーヴィルで過ごしながらか、或る侯爵の史伝を書くための研究をしていたという伝記的な事実まで調べ上げているのである。そのうえこの編集者は、単に調査の緻密さだけを誇る人物というわけでもない。「編集者の序」のなかで、彼はまず日記のテキストにたいし、「われわれはそれをいささかも変えることなく出版する」(5)と倫理的に宣言している。事実、彼はそうした編集契約を述べるだけでなく、テキストのなかの空白個所はそのまま提示して見せ、線を引いて消されている原文の字句は、脚注をつけてそのもとの字句を推測してみたり、それが不可能な場合は率直にそのことを告白してもいる(6)。

かくも有能にして律儀なる編集者。だがこのように見てきたとき、作業の堅実さを予告しながら、早々に退場してしまうこの編集者の身振りのなかには、はからずもあの写真の仮装者のいかがわしさと同じものを感じることができたとするれば、その読者は確かな直観の持ち主であると言えよう。この編集者はむしろ、日記の实在を読者に信じ込ませるためのこれらの作業を結果として逆手にとっている。彼の多彩なる働きぶりは、単に読者へ予備情報を告知するにととまらず、実証的な作業の一覧表のような様相すら呈している。別の言いかたをすると、それはこの編集者が同じ作業項目を決して何回も反復してはいないということである。テキストの全編を通じて骨の折れる校訂作業を継続するかわりに、最低限必要な演目を披露することで、すでに冒頭部で十分その使命を完遂してしまったかのような印象を、読者に与ることが重要なのだ。実際、この小説の表紙等には、日記の真の考案者である作者の名前が表示されているのだから、序文の設定をそっくり信じ込んでいる者などいないだろう。露呈することを見越したこのような演出があざとくもいかがわしいのは、ひとえにここで演出されている編集者像が、あまりにも出来過ぎた編集者一般の理念型であるからにほかならない。では、見るからに理想的なものとして造形されたこの編集者像というのはいったい何であるのか。

仮装者が写真のなかで演じていた人物、というのがその答えである。戯画の対象にふさわしい理想の表象として君臨していたその人物、それは当時の仮装者たちが在籍していた高等師範学校で校長を務めていた文学史の大家である。冒頭の写真は、毎春催されていた、師範学校の恒例の演劇祭のうちに撮影されたものなのだ。その芝居の筋は、現職の校長が、こともあろうにブラジルに乗り込んで、民衆を圧迫していた独裁者ティエモ・ダナオスを征伐するという荒唐無稽な内容であった。この寸劇は、一九二五年三月二十八日に観劇に訪れた同校出身の左翼連合系の大員たちを含む聴衆の前で上演されたが、「大臣たちは自分たちの心配事を忘れて腹の底から笑い声を上げた」(7)という記録が残されている。この寸劇の企画に際して指揮をとった学生は、やがて『十七・八世紀における反射概念の形成』や『異常と正常』といった著作で知られる科学史家となる青年であるとされているが、いっぽう、芝居のなかで独裁者の妻役を演じ、数十年後にAPF(フランス精神分析連盟)の創設者となる別の同級生の回想によれば、あの仮装者もまた胞友である『アデン アラビア』の著者とともに毎年、積極的に劇の準備に奔走し、古着屋へ衣装探しに行ったり、脚本の台詞を執筆したりしたという(8)。もし

文学史的な視点から叙述するなら、こうした仮装者の情熱は、その後いくつかの優れた戯曲を残すことになる彼の演劇にたいする関心の深さを予告する徴候であるだろう。だが、実のところ、これはいささか奇妙な徴候である。なぜなら、この仮装者は翌年の二六年三月二十日に上演された寸劇、「カンビュザ船長の嘆き」においても、再度その校長の役を演じているからだ(9)。またひるがえって見れば、あの日記の主人公自身も--今世紀初頭の文学研究との史学あいだに、決定的な区分線の確立されていなかったことを考慮するなら--、伝記執筆の企てに挫折して芸術作品へのブルースト的転回を決意することで、理想的な文学史の作業を不完全に模倣していたことになるだろう。この結末は、あの律儀な編集者によっては、小説の序文では決して口にされない事態ではあるが、その後もこの小説の作者が、あの膨大なフロベール伝に挑み、それを放置していることは、やはり未完を宿命づけられた反復に、深く彼が魅入られてしまっていたことを物語っているかのようではないか。

II

これほどまでに仮装者によって執拗に演じられながら、おそらく彼にくらべれば、文学史的な記憶のなかでほとんどくすんだ輝きしか放っていないギュスターヴ・ランソンなる人物については、読者のためにあえてその文学史的な紹介をしておくのも無意味ではあるまい。ギュスターヴは一八五七年にオルレアンで生まれ、十二歳のときに一家がパリに移転したため、リセはシャルルマーニュ高等学校に入学している。彼は七六年に高等師範学校に入学し、三年後には卒業、文学の教授資格を取得してまもなく、バイヨンヌ高校の教員に任命されることで、文学教育者としての経歴を開始し、ムーラン、レンヌ、トゥールーズと任地を移すあいだに要職につくようになる。そして八六年には春から夏にかけての数か月間ながら、ロシア皇帝ニコライ二世の子息たちの正式な家庭教師として派遣されるという大役を命じられている。のちに彼が回想して書いたロシア旅行記によれば、当時のロシ宮廷ではロシア語とフランス語がほとんど日常的に使い分けられていた。だが、その一方で、ロシア人たちはフランス文学そのものは以前ほど愛読しておらず、科学の分野をのぞけば、「明らかに、ロシア人にとっては、今日の知的修養の教材はロシア文学である」(10)という認識をこの家庭教師にもたらしめている。外国における自国の言語と文学のこうした受容の差異は、あるいはランソンに、かつての威厳あるフランス文学の普遍性について懐疑を抱かせ、その固有性にたいする自覚を促したのではなからうか。

ところで、この時代のフランスの文芸批評をしるしづけていたのは、ヴィクトル・クーザンからオーギュスト・コントへの認識論的なシフトである。テーヌの継承者の一人、ジョルジュ・ルナールが世紀の曲がり角にまとめた『文学史の科学的方法』(11)によると、批評の目的は時代の明確な区分を行ない、法則を発見し、その移行を説明することである。この意味で、文学史はあまり個々の作家の固有性、特異性には関心を抱いてはおらず、まず何よりも諸世紀の流れのなかに文学的な時代区分を標定することを目指していた。帰国後のギュスターヴはパリに居をさだめ、それから約八年のあいだミシュレ高等学校やルイ＝ル＝グラン高等学校で修辞学の授業を担当し、サン＝ドニのレジオンドヌール会館でも文学の講座

を受け持つことになる。彼はこのころから著作活動にも手を染めており、『作文と文体の初歩』(一八八七年)を皮切りに、「ニヴェル・ド・ラ・ショセと催涙喜劇」(八八年)という論文で博士号を取得し、さらに『フランス文学史』(九四年)を上梓して一躍名を馳せた。ここで、その著者が自らの時代をどう捉えていたかということに触れておく必要があるだろう。たとえば、ルナンのような実証主義にたいしては、意外に見えるかもしれないが、若きランソンは歴史学をそのまま文学の領域に移植することに不満を隠しえずにいる。彼はルナンが四八年の『学問の将来』の序文で、「文学史の研究は、人間精神の作品の直接的な読解の大部分にとってかわるべく定められている」という一節を書いたことに憤慨しているが、それというのも、「この文章は文学にたいする否定そのものである」、すなわち、「それは文学を、歴史の一部門によってしか、風習の歴史とか観念の歴史によってしか代替させないということだからだ」と語っている(12)。

『フランス文学史』におけるこうした宣言をめぐっては、いまは次のような二重の指摘がなされるべきだろう。第一には、当時の諸学科間のダイナミズムが、諸人文科学における文学の自律性を規定していたということである。この時代は一八七一年の普仏戦争の敗北による精神的外傷を抱えつつ、敵国からの科学精神の輸入とともに高等教育における学科の再配分・再編成が進んだ時代である。その渦中であって、虚構の言説を扱う文学から派生して、事実についての厳密な学問たろうとしていた歴史学は、文学にたいし自らが科学的であることを欲しており、大学内部におけるヘゲモニーの獲得という野心を捨ててはいなかった(13)。第二に、より理論的な次元において、この歴史学からの脅威がランソンに文学と呼ばれているものの文学性に関する意識を先鋭化させることになる。「文学的な記念碑的作品monumentを、歴史の記録史料documentから分離する必要がある」(14)。

彼が構想していたような文学の固有性は、先行する批評家たちにたいする彼の歴史観をさらに見てゆくことによって明確になるだろう。実証主義批評の祖と言われるサント=ブーヴにたいしては、「彼は伝記を作品の説明のために使うかわりに、伝記を構成するために作品を使った。彼は文芸の傑作も、將軍の未熟な回想録や婦人の感情的な手紙と同じようにしか扱わなかった。こうしたどんな書き物であろうとも、彼は役に立たせたのである」(15)。またテーヌはというと、「作家を民族、環境、時代によって規定することで、じつは個人を無化してしまっていたのであり、そこでは個人はもはや三つの一般的な原因の次元の競合関係によって偶発的にかたちづくられる、諸現象を束ねたものでしかなかった」(16)。最後に、ブリュンティエールは、このテーヌの決定論をジャンルの進化という視点から修正しはしたが、「いかなる芸術作品、いかなる趣味の形式も、分析される先在的な諸条件によって絶対的に決定されているということは正しくない」(17)とされる。一八九五年に語られたこのような批評史観は、同時代の文学的環境におけるランソン自身の方向性をよく示している。ランソンはこれら三人の著名な批評家たちがいずれも、テクストという作家の本質の顕現する領域にたいし余りにも無関心だと考えている。ランソンの意味での実証主義批評は、作品との直接的な接触を伴うべきものなのだ。したがって問題なのは、そのような作品を書いた作家という個人の存在を、いかにして他の個人から際立たせるかということである。そうした方法論的自覚において、「フランスの文学の歴史」を書く

という企ては、もはや文学的肖像の回廊をつくることでも、外在的な三大要因に作品を還元することでもなく、ましてやジャンルの発展の歴史のなかに作品を溶け込ませることでもない。すなわち、「文学史の目的とは諸々の個別性 individualitésの記述なのである」(18)。

ランソンは、九四年にはブリュンティエールの代理として母校の高等師範学校に着任し、一九〇一年には助教授に昇格、さらに世紀がかわってからまもなくソルボンヌに教授として就任、一九一九年まで雄弁術の講座を担当している。『フランス近代文学史提要(一五〇〇-一九〇〇年)』(一九〇九年)という学生向けの書誌学的な著作が書かれたり、彼のテクスト・クリティックの代表的な仕事であるヴォルテールの『哲学書簡』(同年)やラマルティーヌの『瞑想詩集』(一五年)の編集・校訂が行なわれるのもこのころである。いっぽう、高等師範学校にはセーヴルに女子校があり、当時ランソンは同校でも仏文学を講義していた。だがその後、十九年には母校であるユルム街の学舎に校長として迎えられ、二七年の年度末までその職務を果たすことになる。だから、例の寸劇が若き仮装者たちによって上演されたのは、すでに七十歳近い老人だった彼の引退間際の出来事であったわけだ。退職後の彼が文学教育者としての功績を認められ、二九年はレジオンドヌール二等勲章という勲章を実際に授かったことが彼の経歴の最後をかざる挿話らしい挿話になる。実際、彼が七七歳で亡くなるまでの最晩年は、二〇年代までの旺盛な執筆活動に比べると、これとって著作らしいものは書かれていない。

すでに挙げたような代表的な著作に見られる、「lansonisme」と称される彼の批評の方法論は、今日ではおもに二冊の論文集、『文学史の方法 人と書物』、『方法、批評、文学史についての試論』のなかで読むことが出来る。しかし、じつはこれらの論文集ですら、彼が亡くなってから ということとは、「文学史」上の人物になってから 〇、四十年近くたって初めて編集されたのである。もっとも、だからと言って、ことさらにギュスターヴの名誉回復が求められているわけではないことに注意を喚起しておこう。たとえば、ニザンが友情厚きあの仮装者によって復権されるまで、共産党との反発ゆえに死後ながらく抹殺状態に置かれていたという事情と、ニザンたちの反抗心をかりたててしまった校長の存在が、現代的な批評意識の臨界面に浮上してこなかったことは明らかに性質が異なっており、「新旧」批評論争がおさまって十年以上たってからようやく出始めたばかりのいくつかのランソン研究も(19)、忘却と復権という素朴な構図のなかに放置されるわけにはいかないのである。おそらく人はニザンにならって、「愛国主義で、偽善者で、権力を持ち、軍隊を尊敬している小柄な老人」(20)という批判めいた言葉を口ずさみさえすれば、ギュスターヴに関してほかに言うことはないと思ってしまうのだ。しかし、逆説的に聞こえるかもしれないが、あえて表面に出るには及ばない存在として状況を制御することができたという意味では、ランソンというのはむしろ勝利者にも等しい記号かもしれない。ランソニスムという語が今世紀の文学的環境に存在しえたことがその証拠である。では、そのランソニスムの文学史が目的としていた「個別性」とはいったい何であるのか。

おそらくはさまざまな一神教文明のなかでも、一般にヨーロッパ文化ほど神の似姿としての個人の特異性、自律性、自己充足性に高い価値を認めてきた例はないと言えるだろう。社会の構成単位を分割していった最後に残る原子という消極的な定義にととまらず、共同体の起源そのものとして比類なき創設者の役割を担った個人の諸特性は、神から授けられた靈感ないしは能力によって偉業をなしとげ、他の構成員たちのうちに敬意さらには崇拜の感情を喚起する英雄的な性格を内包している。文化人類学の領域では、そのような英雄として人間が個別化されるタイプを、「古典的英雄」、「伝説的英雄」、「日常的英雄」の三つに分類している(21)。古典的英雄は、自らも超人として神々の世界に住まう神話的な存在であり、偉大な自然の力を象徴するような人格である。伝説的英雄は、政治・軍事・宗教といった特殊な領域における、現実の、しかしカリスマ的な人物であり、その死後も時代全体や社会の模範たる地位を獲得している存在である。この場合、重要なのは、彼が実際になしとげた業績というよりも、その特異な存在じたいのほうである。これにたいして、日常的英雄という最後のタイプは、その個人が専門領域で発揮した能力にたいする大衆の流動的な評価を糧にしている。それは芸能、スポーツ、諸技術の分野で毎日生産されるような、短命にして身近な英雄たちである。十七世紀から十九世紀にかけてのフランス社会において形成されてきた«*homme de lettres*»の集団と、彼らにたいする社会的崇拜　少なくともその時期の日本や中国には作家が国葬の対象となったケースはない　は、第二の英雄のタイプの伝統にむすびついているものと考えられる。そして第三共和制下の大衆社会の発達とともに、作品の舞台とともに読者層も変質し、日常的な英雄の大量生産が始められる。

ここであらためて、そうした近代市民社会の状況を説明するまでもないとは思いますが、たとえば十九世紀以降は、革命後の社会における都市人口の膨張があり、そうした市民社会への近代的な人権の法概念の浸透があり、それにつれて明らかになってきた経済的不平等の未解消がある。このように、民法上の次元で個人(というか成人男性)の平等を理論的に約束された自我の万能感が、経済的な次元で平等化されなかった私有地や生産手段からくる無力感にたいして軋みを生じるといのが、ロマン主義と呼ばれるものの社会学的な説明とされているものである。だが、より注目すべきことは、この市民社会が単なる個人の権利保証の場ではなく、同時に緻密な行政管理の空間として組織化されつつあったことである。中世さらには近世にいたるまでの都市の空間では、住所や自己の名前すらも定まらない放浪者、浮浪者、狂人、犯罪者たちの流動が比較的自由に認められていた。しかし、ナポレオン法以後、徐々に整備されてゆく司法制度の網目によって、戸籍という制度のなかに登録される瞬間から、個人は不変の名前と身分証明書を義務づけられる。証明書の偽造は終身強制労働という重罰の危険を冒すものであり、もはや都市はかつてのような不定形な空間ではない。

たとえば、今日ではあたりまえのこととされている建造物ごとの番地付けは、パリでは一八五五年にナポレオン法によって義務づけられた制度である。数記法によって区画された都市空間では、さながら方眼紙の座標のように、個人の出生や居住、就労、結婚、死亡といった出来事をピンで地図のうえに留めてゆくことができる。また、こうした都市行政と公的な制度としての郵便の発達が密接に関わっている。フランスで最初の切手が登場するのは一八四八年のことである

が、公的制度としての郵便行政はすでに十八世紀末から整備され始めていた。郵便制度の核をなす概念のひとつに、個人の私文書は開封されてはならないとするものがあるが、こうした私書不可侵*inviolabilité* の権利が法的に保証されたのは、じつに著作権法の制定と同じく一七九一年のことである(22)。もっとも、貴族が私的に派遣する密使とはことなり、公募によって雇用された配達人が、通信情報を横領することの侵犯性を内面化するほどに制度が浸透するには、さらに時代が下るのを待たねばならないのだが。

しかし、いっぽうで、この配達システムが実際に社会的に機能しうるためには、配達人にとって未知の宛先人を容易に特定できる方法があらかじめ確立されていなければなるまい。書簡が無事に配達されるということは、それが横領されたり開封されたりしないという安全性とともに、宛先人の住居が誰によっても自動的に特定される可能性をも意味している。郵便制度が機能するという事は、それゆえ、行政区単位での市民個人の生活圏の定住化、管理化を前提にしているのである。実際、宛先人のもとを訪問するのは、配達人ばかりとは限らない。ウォルター・ベンヤミンは第二帝政期のパリをめぐる歴史分析のなかで、『悪の華』の詩人が度重なる債権者からの追跡をかわすために移転を繰り返したことを記している(23)。パリ市内における詩人の移転先は、一八四二年から五八年のあいだだけでも十四箇所を数えという。こうした都市管理の毛細血管的な拡充ぶりについて、ベンヤミンは、パリ市警に創設された鑑識課の課長アルフォンス・ベルティヨンの名を挙げ、さらに、推理小説というジャンルがこの時期に誕生したことを指摘している(24)。推理小説という日本語からは直接的に読み取れないが、周知のように、フランス語ではこのジャンルを指すのに警察という名詞から派生した形容詞が使われる。犯罪の発生によって物語が始動する推理小説の空間とは、語源的にはまさしく都市行政の監視空間なのだ。

人相・身体の記事だけで同一人物を特定する作業は、一八三二年に受刑者の身体に烙印をつけたり手足を切断したりする刑罰が廃止されてから困難をきわめるいっぽうにあった。いっぽうで、再犯者の数は一八七一年から増加し始めていたが、世紀末には裁判中の犯罪者の過半数にまで達するようになっていたのである。ベルティヨンの『再犯者同定と累刑者保安処分法』によれば、彼が司法写真と人体測定を組み合わせた犯罪者の同定方式を考案したのは、五九年までのパリ市民の戸籍簿がコミュンの動乱で焼失してしまい、そのため或る世代以上の人間なら、勝手に好きな名前を名乗っていても判別できないという一種の無法状態が発生してしまったからにはほかならない(25)。だが、そうした空間に遍在的に漂う司法の眼差しは、あたかも人の生涯のあらゆる場面に立ち会い、先回りしてすべてを台無しにしてしまうあの民謡のなかの「せむしの小人」——ベンヤミンにつきまわっていたあの強迫観念——のようでもある。ことによると、この第二帝政論の執筆から約二年後に、スペイン国境のポル・ボウで旅券の問題から拘留され、強制送還の脅迫を受けたとき、彼の脳裏にはやはりこの不吉な形象が浮かんでいたかも知れない。記念すべき王や英雄の個性にかわって、計量可能な人間の個別性を扱う学問が、斬新的に姿を見せつつある社会、病者が健康者よりも、狂人が正常者よりも、犯罪者が通常の市民よりもいっそう強度の個体化を強いられる社会。外観の多様性のなかから特殊な本質を識別しなければならなかったかつての博物学者の注視ではなく、標本の統計学的な曲線が、予定調和的に描き出

す生物学的な偏差値に憑かれた頭蓋計測者による灰褐色の透視図法。主観性の零度を装ったその消失点から、眺められ監視される社会に流通するにふさわしい個性の物語が語るのは、すでに華々しい騎上の槍試合ではなく、顔のない隣人たちのささやかな逸脱ぶりであり、誰にでもありがちな私生活の無意識的な偏差としての「個別性」にほかならない。

IV

では、こうした日常的な「英雄」たちを前にした文芸批評は、「個別性」をどのようなかたちで主題化していたのか。たとえば、一八八八年に書かれたエミール・アヌカンの『科学的批評』は、すでにこの概念をとりあげて自分の議論に組み込んでいる。「個別化の原理は、特殊な精神構造を備えた人格、あるいはたぶんそうした脳の構造を備えた人格を、作品や行為や発言を通じて、或る瞬間ふいに社会的集団のなかに出現させるものである」(26)。アヌカンは心理学に基づいた彼の科学的批評の方法を«esthopsychologie»と命名しているが、これは趣味判断の批評との対置関係に置かれている。この方向をさらに延長させた批評家が、ポール・ラコンとレオン・パシャであろう。前者は芸術家の思考の法則を研究することで、文学活動における情動的な生活の優位性を前提に、実生活で体験された感情と作品のなかに表示された観念との関連性を、心理学の立場から明らかにしようとし、また後者は、芸術活動を個人的な諸要素のなかにおいて一個の生命現象として考察することの必要を主張した(27)。そうした角度から規定される作家の個別性というものは、文学作品へ投影された作者固有の情動の構造であり、実在する特殊な人格である。いっぽう、ランソンにとって、個別性を体現した作家の存在は、まず歴史の文脈のなかで環境的な要因に還元しえない厄介な対象として現れる。

こういった説明では手のとどかない何物かが、すなわち、あれらの原因のどれもが決定作用を及ぼしていない何物かが、しばしば残存している。だが、作品の秀でた独創性が含まれているのは、まさしくこの決定作用を受けない、説明されざる残滓のなかなのである。コルネイユやユゴーがもたらした個性的な貢献であり、また彼らの文学的個別性でもあるは、この残滓なのである(28)。

環境・遺伝的な要因、前の世代の影響といった決定論からこぼれおちるもの、それこそが他の多くの人々から特定の作家を個別化するものである。だが、文学の歴史の平面上にそうした傑出した作家を並べてゆくと、その様相は歴史的な連続性を切断しているように見える。

[]予測されない諸要素が付け加わったり、既知の諸要素が再び組織されなおされたり、強度が不意に高まったり、美の自然発生的な創造が起こったりしたのであって、こうした諸現象のなかで個別的な独創性が明らかになってきたのである。この独創性に理解が到達するのは、それらの現象の正確な記述によってである(29)。

とはいえ、そうなると文学史の言説は、偶発的な諸現象の「説明」ではなく、統一性を欠いた「記述」のモザイクにとどまるのではないか。それは歴史としての統一性を、ひいては文学の自律性を見失うことになりはしないか。さまざまな人文科学を補助として、文学的現象の正確な記述を行なう企ては、かくして作家の心理学的な人格から作品そのものの固有性へとその照準を転換することになるだろう。

個別性の定義こそ、文学の分析が到達すべき地点である。そして個別性とは、文学作品の諸特徴を標定することに存している。諸特徴というのは、文学的、歴史的、社会的、伝記的な諸原因、またこういってよければ、心理学的な諸原因によってさえ説明される全てのものだが、またしかし、説明できないもの、作家の還元不可能な独創性を構成しているものである。[]だが忘れてはならない、定義すべきは芸術作品であって、現実の個人ではないのだ(30)。

ランソニズムはしばしば作品を作家に還元するというサント=ブーヴ的な批評のように思われているが、実際はその逆である。作家の個別性は作品のなかに見出されるものであり、作品を構成するものであるが、それは現実の作家個人のなかでは規定されえない。ランソンが歴史認識の次元とは別の強力な原理を接続するのは、まさにここにおいてである。われわれがランソンの同時代批判で確認しておいたように、それはまさに「読むこと」lectioへの回帰という教育的な原理である。「テキストに向かうこと、註釈を捨てること、これによって--忘れてはならないことだが--、ルネッサンスも素晴らしい成果あるものとなったのだ」(31)。ランソンが読解の対象とするのは、古典の書物よりもフランス語による名作なのであるが、「テキスト読解はその本質において、宗教学やギリシア・ラテン文献学において実践されていた註釈学と同じものである」(32)。

こうして作家の個別性の解明は、還元不可能な部分を残しつつ、もうひとつの解明、すなわちテキスト読解によって補償される、というか繰り延べられることになる。ただし、ランソンはテキストの意味が自足したものであるということ、すなわち、それを書いた作者にとっての意味という特権的な一義性を前提に議論をしている。「その公準は、明らかに、テキストがそのなか、われわれの精神や感性から独立した一個の意味を、読者であるわれわれにたいして有しているということである。テキスト読解の価値を疑問視する人々でさえ、このことは否定しないと思う。あらゆる文学作品には、詩でさえも、そのなかで恒常的で普遍的な意味が存在し、その意味には誰もが到達できるはずである」(33)。書く主体とその主体が書いたものとの直接性の関係とでも言いうる、この一対一の対応の関係は、それが起源として措定された瞬間から、読者にとって目指されるべき唯一の幸福な合一として現れる。教育者としてランソンが抱いている不満は、多くの読者がじつは読む術を心得てはおらず、自分の感情や思考を作家のそれと信じ込んでいることである。ランソンは、この主観性と客観性の分離のためには、文献学、伝記研究、原典批評、文法や文体論、作詩法の統計学といった複合的な補助が必要であることを強調している(34)。したがって、実践的な演習としてのテキスト読解は、逐語的な読みの作業を通じて、個人的な印象を明確にし、解釈し、調整し、拡充し、修正することを演習者に課するが、その果てに在る客観的な意

味への到達は、補助的な知を総合した歴史記述による、個別性の把握へと送り戻される。原理的には万人に到達可能だが、そのためには歴史記述とテキスト読解による螺旋的な接近が要請される地点として定義された「個別性」--これが民主主義の文学教育の新たな課題なのだ。

だが、そうした特権的な意味の一義性の傍らで、同時代の精神医学は、筆記者とそのエクリチュールのあいだに計測不能な亀裂を開く力と遭遇しつつあった。フロイトがジョヴァンニ・モレルリの絵画鑑定法の著作を読み、画家が機械的に描きなぐったような二次的な細部、手癖にまかせて描写されたような部分にこそ、画家を特定しうる示差的な特徴を発見するという技術に、分析療法との親近性を感じとったのは、おそらくはこの時期と前後してのことである(35)。かくてフロイト以後、言い間違い、記憶違い、書き間違いなどの逸脱は、個人の精神史を物語る日常生活的な病理学的事象として対象化されてゆく。そしてシャルコーの弟子であったピエール・ジャネは、八九年に発表した博士論文、『心理的自動運動』において、催眠状態にある女性患者の第二の人格が自動記述を行なう例を報告するだろう(36)。

可視の領域では明らかに同一の人物が、別個な主体として言語活動を行なうということ。こうした現象は、もともと社会史的には、「テーブルをつくりませんか」という奇妙な問いが街路やサロンでの挨拶がわりになっていたという「交霊円卓」の流行として第二帝政期から知られている。たとえばユゴーは、五四年十二月二八日のセアンスで、自ら霊媒となってジョジュという霊の言葉　たとえば、この霊はいきなり「人間とは単純な自我ではなく、複雑な自我なのだ。その皮膚の下には無数の存在がひそんでいる　　」(37)といった、精神分析医めいた穿った言葉を語り出すのである(!)　　を書き留めているが、ルヴァイヤンが指摘しているように、そこに視覚的に異なる二つのタイプの筆跡を観察することは決して不可能ではない。おそらく、この筆跡をベルティヨンに鑑定させてみたいという理不尽な衝動に駆られるのは、悪魔島に送られたあの陸軍大尉ばかりではあるまい。

もっとも、世紀の曲がり角にカルノやド・フルサックといった医師たちが打ち立てようとしていた、神経症患者の筆致といわゆる正常者の筆致の区別は、やがて第三共和制も後半になると、それを独立的に扱うために、マンハイマー・ゴメスによって「筆跡病理学」の対象とされるようになる(38)。さらにピエール・メナールは、精神分析に組み入れられることも従属することもなく、むしろ精神分析を包含するような科学的な筆跡学を構想するに至るだろう(39)。この医師によれば、精神分析が苦勞して明るみに出すのは病んだ劣等な精神活動だけであって、意志のような高度な心的現象ではないし、かといって諸情勢の競合関係といった環境条件でもない。だから、書記の主体の同一性を全的に無意識へ帰属せしめることは耐えがたい誤謬ということになる.....。

ある意味でランソンも、彼なりにこうした無意識の深淵を埋めるべく、作家を個別化する作業場を整備するための手続きを体系化していると言えよう。それはテキストの同一性を確定し、それをあらためて作家の同一性にフィード・バックさせることである。「文学史の方法」と題された論文において、彼は読み手が検証すべき九つの観点を挙げている。すなわち、テキストの真正さ、欠けている部分の無いこと、日付確定、異本、草稿、字義的な意味と文学的な意味、題材の源

泉、読者への影響というのがそうである(40)。われわれが冒頭で確認しておいた戯画的なまでに理想的な編集作業というのはこれである。しかしながら、これは単にランソンの批評の到達点ではない。ここに浮上してきているのは、その起源があのかくりチュールの不安な経験のなかに隠されていたような一つの再構造化の試みにすぎない。このエクリチュールの主体は、筆跡鑑定家によって二次元の視覚野においてのみ探し求められたのであるが、問題なのは、「auteur」の同一性を操作可能、保存可能なものに変換するような、一種の大規模な地殻変動である。

たとえば、一般に個人主義的な濃度の高いロマン主義には、不可視の説明不可能なものとしての才能にたいする名誉の授与という特徴がある。目に見えるかたちで現存している古文書への価値付与は、作家の靈感という神秘的な源泉にたいする関心と密接に結び付いている。かくして草稿の保存は、作家自身にとっても収集家にとっても、それが帯びている根底的な価値を自覚するということによって、十九世紀以後、新たな次元に突入することになる。こうした自筆原稿の聖別化は、収集の対象領域の拡大とも密接な関係を持っている(41)。筆写であれ印刷であれ完全なテキストに執着していたその前世紀とは違って、物質化された靈感としての自筆原稿は、未完であるがゆえに、いっそう神々しい起源に近いものとして一種の威厳を獲得し、その威厳は決定稿から準備段階の手帳まで作家の生産物の全体に伝染してゆく。さらに、中世時代の手稿はその存在がきわめて稀であるため、収集家たちはすぐに市場で見つかるような、比較的新しい時代の文書資料にまで手を延ばし始める。

このような動向については、さらに主要な三つの軸を挙げることができるだろう。第一に、同時代の言語で書いていた作家たちは、「全集」の対象に入れてもらえたという意味で、ようやくギリシア・ラテンの古典作家たちと肩を並べることになる。個人の「全集」(Euvres complètesという観念は今日ではありふれた編

集上の形態を指しているが、創始的な価値を持つ労作として、博識な文献学的作業を通じ、或る近代作家についての「全集」を編纂したのはカール・ラッハマンであろう(42)。一八三〇年代末に編まれたこの「レッシング全集」全十三巻においては、作家の下書きが中世の写本と同様に扱われ、テキストの字句の正確さを調整するための支点として役立てられている。その後も一世紀のあいだ、この原則が校訂作業のための文献学を制御することになり、ロシアでもボリス・トマシェフスキーがこの補助的な学問に「テキスト学textologie」という名称と、その理論的な台座を与えてやることになる。

第二に、草稿の存在は、文学的生产のプロセスを再構成することを可能にしてくれる。下書きの原稿は文体の訓練場である。アントワーヌ・アルバラは、まさにこのことを『大作家の自筆修正から学ばれる文体の仕事』という著作で証明しようとした。同書によれば、傑作の生成過程はすべからず、美しいフランス語になるように単語を節約しようというエコノミーの刻印をきざみつけられている。言い換えれば、文章の書き直しrefontは作家の不能力のしるしではない。反対に、それは才能のなせる業なのである。「それゆえ、自然な文体というものは、仕事抜きで書かれた文体ではなく、仕事の跡が現れていないような文体のことである」(43)。かくして、草稿段階の価値づけは、靈感を吹き込まれた詩人という

自発性の価値を脱神話化し、文学的労働における才能に関するコペルニクス的な転回をもたらすことになったのである。

第三に、文学教育におけるフランス語のテキストの読解の地位昇格ということが挙げられる。フランス語の作家たちのテキストが教育プログラムのなかに導入されたのは、一八八三年のフォンターヌ報告によってである。ヴィユマンやクーザンの時代、すなわち四十年代前半は、フランス語の作品の読解はバカロレアや学士号の資格試験のための一部に組み込まれる。七二年にジュール・シモンの回状が修辞学教育の役割の終焉を主張するが、これからの学生は作家に精通するために作品を読むのであって、作家を模倣するためではないといった教育方針が形成されつつあるという意味で、これは制度的にもひとつの転換点を準備している。テキスト読解とは、その限りにおいて何よりもフランス語のテキストの読解であり、ギリシア語やラテン語による古典のそれではない。こうした教育改革について、ランソンは、すでに彼が学生だった時代の授業にも、視線をテキストへ引き戻す習慣がなかったわけではない、と一九一九年になってから回想している。「私には二人の修辞学の教師がおりまして、一八七五年ごろのことですが、彼らは日々、来たるべき明日のフランスの授業を行なっていたのでした。[

]彼らはアドレとド・ラ・クーロンシュで、その伝統は失われたわけではなく、フランス語の読解はずいぶん多くの教室に根を下ろすことになったのです」(44)。この発言には、回顧的な言説に特有の自己正当化の成分も少しはあるだろうが、一八八一年には、教育通達書の起草者ウージェーヌ・マニユエルが、新しいカリキュラムの必要性を説明して、テキスト読解は「選抜試験の主要なテストであり、[]文学研究の試金石である」(45)と言明している。八～九十年代に示されたこれらの教育改革案は、一九〇二年のカリキュラム改革や一九〇九年、二三年の通達書においては決定的なかたちで採用されることになるだろう。文学教育の将来は今後は修辞学のなかにではなく、フランス語のテキストの襲のなかに宿ることになるだろう。そして作家の「個別性」は、その展開されるべき襲、押し広げられる文字の折り目のなかに探し求められるであろう。

そうした動きのなかで、ランソンにとっての「個別性」は、作家とその共同体とのあいだの相互作用という視点から逆照射を受けることになる。「文学においてはかくも明白にして現実的な個人の役割、個別性の記述、批評と文学史の欠かせざる使命、これらのものはわれわれの眼を以下の事実にたいして閉ざさせたり、それを確認するのを妨げたりしてはならない。偉大な文学的人格というのは、少なくともその大部分は、集団的な生活の形象であり象徴である。そうした人格は、集団から放射されている数々の光線を一瞬にして集中させる焦点であり、ついでその光線を様々に結び合わせたり変化させたりして、再び集団に送り返すのである」(46)。道徳的な水準での作家の象徴化は、さらに一九〇一年になると、集団の利益との関連において特殊性を中性化するという道を進み始める。「作家の才能にそれでもやはり含まれている美しく偉大な要素、それは彼を一人だけ孤立させるような特異性ではない。それは、この特異性じたいにおいて、時代や集団の共同的な生活を、彼のうちで一つにまとめ象徴することである。それは代表的であるêtre représentatifということなのだ」(47)。

このような文脈で理解された特異性、個別性の概念においては、もはや現実の個人一人ひとりが問題なのではなく、形式としての個人、あるいは、個人という

理念が問題なのである。ランソンの「個別性」とは、民主主義的なシステムのなかにおける市民の存在様式である。同時代の社会学者エミール・デュルケムが語ったごとく、「このように解された個人主義とは、定義のうえで、自我の賛美ではなく、一般的な個人の賛美なのである」(48)。本人もドレフュス派の戦列に属していたこのデュルケムの言葉は、ブリュンティエールにたいする反論として書かれた論文のなかに読まれるものだ。というのも、アカデミズムの牙城となっていた『両世界評論』にブリュンティエールが発表した「裁判の後で」という論文は、ユダヤ人の跳梁を許してきた個人主義思想と、自らの専門領域を超えて発言する「知識人」への激しい批判だったからである(49)。

ランソン自身は九八年一月十四日の「ローロール」紙に掲載された請願文に、百余名の作家、文学者らとともに署名をしているが、むろんそこには同時代の文学批評をある意味で代表していたルメートルやファゲといった重鎮たちの名前は見られない。ランソンにおける「個別性」の中性化が、このような文脈での政治化をも意味しているというのは、たとえばソルボンヌにたいする『アクション・フランセーズ』紙からの攻撃が強まっていたからでもある。このパリ大学文学部への批判は、一九二二年の教育改革にまで遡って展開されるのであるが、これは中等教育を再編成して、バカロレアの受験者に四つの科を選択できるようにしたものであるが、ラテン語とギリシア語の教育を含む科は一つだけで、そのいずれも含まない科が一つ設けられるというものである。反ソルボンヌのキャンペーンが最も激化するの是一九二一年からその翌年にかけてのことで、その中心にあったのはアンリ・マシスとアルフレッド・ド・タルドという二人の記者が「アガトン」という筆名で発表した一連の記事である。プラトンの『饗宴』に起源をもつことからして、古典世界への郷愁をコノテーションとして帯びているこの批判者は、ソルボンヌを旧ソルボンヌと新ソルボンヌに二分して、一種の貴族主義的な立場から、後者の歴史精神のドイツ的色彩や、民主的な教育方針を攻撃している。これは大学内部の一部の教授陣（歴史学のアルフォンス・オラー、シャルル=ヴィクトール・ラングロワ(彼の運営する教育博物館は一九二二年の改革推進の中心であった)、シャルル・セニョボス、そして文学史のランソンに、社会学のデュルケム）からなる一団である。こうした政治的状況において、ランソンが措定した共同体の代表者という「作家」像は、議会制民主主義という形式に準じた自我の昇華であったとみなすことができる。したがって、歴史認識の水準において説明不可能な残滓であった文学的な個別性の概念は、イデオロギー的な緊張関係を通じて、道徳的な視点から教育の実践の場で操作可能な対象として「文学史」に再統合されたことになるのだろう。

こうしてわれわれは不十分な仕方（あの写真のなかの仮装者にも似て）ではあるが、最終的には文学的な個別性を教育化しようとするランソンの言説において、どのような概念上の位相変換がほどこされているかを見てきた。まず、彼にとっての文学の概念は、歴史記述の平面に個人が特異な作家として現れない限りそれ自体では歴史的な文脈で規定されえないものであった。そして、特異性において作家を把握することは、読解の直接的な経験のうちに作家の個別性を把持することに送り返されざるをえなかった。こうして個人の同一性から出発して、それを作品の同一性へ、そしてさらに究極的には文学という領域の同一性へと展開する文脈にあって、ランソンの「文学史」は、実践的な効果という要請から構

築と解体を繰り返していったように思われる。では、そうした彼の言説自身が長いあいだ丁寧な編集をほどこされずにきたのはなぜか。たとえば彼が、ソクラテスのように「語る」ことで本領を発揮する人だったとは思えない。たしかにランソンは「教育する人」ではあったし、極右からはその教えが青少年に害悪を流すものとして非難されたこともあった。だが、結局のところ、彼は共同体の規則そのものを危機に追い込むことによって処刑されたりはしなかった。彼の批評の言説は共同体に回収されたのである。

この意味において、マラメルの子に出会ったランソンが、そこにアナーキズムを見出したのはもっともなことであった。世紀末のアナーキストと言え、すぐに思い浮かぶのが通称ラヴァシヨルで知られる爆弾テロリストであるが、ランソンは一八九三年のマラルメ論で「マラルメ氏はラヴァシヨルの共犯者である」としてこう続けている、「私は、アナーキズムが社会的な個人主義の到達した極限であるのと同様に、彼の教義は美学的な個人主義の到達しうる最終地点であると言っているのだ」(50)。ところで、逮捕当時レオン・レジエという偽名を使っていた、本名をケニングスタインというこの«auteur»を鑑識・同定して、断頭台に送ったのはほかでもないあのパリ市警の鑑識課長ベルティヨンなのであった。われわれは、このような同一性の唯物論の系譜学を經由した後でなら、最後に、あたかも初めて瞳に触れたかのようにして、冒頭の写真を、もうひとつの別の写真と見比べてみてもよからう(51)。百科事典のなかの「ランソン」という項目に掲載されている、そのもう一枚の肖像写真の人物が、あの仮装者の姿とどれほど演劇技術の上で酷似しているか測定することは重要ではないだろう。すべての写真が犯罪現場の写真であるとしたら、そこに写された人物の姿もまた犯罪者のそれにほかならないのだから。

註

本稿の初出は、東京都立大学人文学部紀要『人文学報』No.285(p.37-59)である。なおランソンからの主な引用は以下の著作を参照し、註には略号と頁数をもって表記した。

EMCHL : Essais de méthode, de critique, et d'histoire littéraire, rassemblés et présentés par Henri Peyre, Hachette, 1965.

HLF : Histoire de la littérature française, Paris, Hachette, 1971, 43e éd.

MHL : Méthodes de l'histoire littéraire. Hommes et livres : études morales et littéraires, présentation d'Ephraïm Harpaz, Genève, Slatkine Reprints, 1979.

*

- (1) Annie Cohen-Solal, Sartre, Galimard, 1985. Voir la photographie No. 19.
- (2) Jean-Paul Sartre, Les Mots, Gallimard, « Folio », 1993, p.203.
- (3) Sartre, Œuvres romanesques, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1981, p.3.
- (4) Sartre, op.cit., p.18. なお、問題の脚注への編集者の署名に関しては若干の補足説明を要する。たとえば、プレイアド版での署名は«(N.d.E.)»という表記になっており、同版の校訂者は、この最後の脚注のことを«(la dernière « note des éditeurs » se trouve p.18)»と記して、編集者を複数扱いしている(p.1722)。いっぽう、同じガリマール社の編集でもプレイアド版の後に出版された「フォリオ」版のほうは、«(Note de l'éditeur.)»という単数形の表記を採用しており(Gallimard, 1992, p.28)、ここに奇妙な決定不可能性が開かれている。
- (5) Sartre, op.cit., p.3.
- (6) Sartre, op.cit., p.5.
- (7) Jean-François Sirinelli, Génération intellectuelle : Khâgneux et Normaliens dans l'entre-deux-guerres, PUF, « Quadrige », 1994, p.323.
- (8) Sirinelli, op.cit., p.324.
- (9) Sirinelli, op.cit., p.335.
- (10) Gustave Lanson, « La famille impériale de Russie en 1886 », Revue Politique et Littéraire : Revue Bleue, t,V, 30 mai 1896, p.685.
- (11) George Renard, La méthode scientifique de l'histoire littéraire, Alcan, 1900.
- (12) HLF, VI.
- (13) Antoine Compagnon, La Troisième République des lettres, Seuil, 1983, p.23-25. たとえば逆にドイツでは、ニーチェが七三年の論文、「生に対する歴史の利害」で、当時横行していた歴史的理性の客観性を批判している。「客観性」という言葉は、最高度に解釈される場合、一つの事件をその動機と結末のすべてにわたって、それが認識主観に全然作用を及ぼさないほど純粹に直観する歴史家の状態として理解されるが、「人々はこれをもって画家におけるかの審美的現象、個人的関心からの解放のことを考えている」のであり、そうした芸術的静観と事物への完全な没入を歴史家にも要請するけれども、「そのように気分づけられた人間において事物が示す形象が事物の経験的本質を再現するとみなすことは一つの迷信である。それとも、そのような瞬間には事物がいわばそれ自身の活動を通して純粹な受動器の上に自らを写生し写真にうつすともいうのであろうか」(『ニーチェ全集』第4巻、「反時代的考察」、小倉志祥訳、ちくま学芸文庫、一九九三年、一七五頁)。そのような描写の瞬間は、ニーチェによれば、じつは観察者の最も主観的な生産活動の頂点なのである。また、客観性の象徴として「写真」が引き合いに出されているのは、この時代一般の典型的な着想であろうか。
- (14) HLF, VI.
- (15) EMCHL, 444.
- (16) EMCHL, 446.

- (17) EMCHL, 447.
- (18) HLF, VII.
- (19) Gérard Delfau et Anne Roche, *Histoire, Littérature*, Seuil, 1977.
Antoine Compagnon, op.cit. Michel Charles, *L'Arbre et la Source*, 1985,
Seuil ; *Introduction à l'étude des textes*, Seuil, 1995.
- (20) Paul Nizan, *Aden Arabie*, préface de J.-P. Sartre, François Maspero,
1978, p.55-56.
- (21) Manga Bekombo Priso, « À l'image de dieu, selon la volonté des
ancêtres », p.27-47 dans *Singularités : les voies d'émergence individuelle*,
textes pour Éric de Dampierre, présentés par le Laboratoire d'ethnologie
et de sociologie comparative, Plon, 1989.
- (22) Paul Chabron, *Quelle belle invention que la poste !*, Gallimard,
1991, p.52-53.
- (23) Walter Benjamin, *Charles Baudelaire : un poète lyrique à l'apogée
du capitalisme*, trad. par Jean Lacoste, Payot, 1982, p.72.
- (24) Benjamin, op.cit., p.73.
- (25) Alphonse Bertillon, *L'identité des récidivistes et la loi de relégation*,
extrait des *Annales de Démographie internationale*, G. Masson,
1883, p.5. なお、ベルティヨンの写真技法については、『19世紀フランス光と闇
の空間』（小倉孝誠著、人文書院、1996年）第III章が図解的に詳しい。近代科学
捜査法の父としてベルティヨンの業績を紹介した論文には、Pierre Darmon, «
Berillon, le fondateur de la poise scientifique », *Histoire*, No 105,
1987, p.42-48 がある。また、ドレフュス裁判での筆跡鑑定者としてのベルティ
ヨンについては、以下の文献を参照のこと。Bertrand Joly, « La bataille des
experts en écriture », *Histoire*, No 173, janvier 1994. 菅野賢治、「筆相
学・ベルティヨン・人間測定法」、『仏語仏文学研究』（東京大学）、第11号、
1994年。
- (26) Émile Hannequin, *La critique scientifique*, Perrin, 1888, p.194.
- (27) Paul Laconb, *De l'histoire considérée comme science. Introduction
à
l'histoire littéraire*, Hachette et Cie, 2 vol., 1894-1910. Léon Paschal,
Esthétique nouvelle fondée sur la psychologie du génie, Mercure de
France, 1910.
- (28) HLF, VII, n.
- (29) HLF, VII, n.
- (30) MHL, XIV-XV.
- (31) HLF, VII.
- (32) MHL, 52.
- (33) MHL, 40-42.
- (34) MHL, 34-35.
- (35) 『フロイト著作集』第3巻、高橋義孝他訳、人文書院、一九九二年、三 一
~ 三 二頁。

- (36) Pierre Janet, L'automatisme psychologique, Alcan, 1889.
- (37) Maurice Levillant, La crise mystique de Victor Hugo (1843-1856), d'après documents inédits, José Corti, 1954, p.206-207. Voir aussi p.210-211.
- (38) Paul Carnot, Étude sur l'écriture ou langage écrit et sur ses troubles, Lyon, A. Rey, 1898. Dr J. Rouges de Fursac, Écrits et dessins dans les maladies nerveuses et mentales, Masson, 1905. Manheimer Gomme,
Principes de Graphologie : extrait des comptes rendus du Congrès des Sociétés savantes en 1913, A. Maioine, 1914.
- (39) Dr Pierre Menard, L'écriture et le subconscient. Psychanalyse et graphologie, Alcan, 1931.
- (40) EMCHL, 43-45.
- (41) Alain Viala, « L'auteur et son manuscrit dans l'histoire de la production littéraire », p. 95-118 dans L'auteur et le manuscrit, sous la dir. de Michel Contat, PUF, 1991.
- (42) Voir Louis Hay, « L'écriture vive », p.10-31 dans Les Manuscrits des écrivains, sous la dir. de L. Hay, Hachette, 1993.
- (43) Antoine Albala, Travail du style enseigné par les corrections manuscrits des grands écrivains, Armand Colin, 1991 (1ère publication en 1903), p.12.
- (44) MHL, 54.
- (45) Eugène Manuel, Rapport sur les concours d'agrégation pour l'enseignement secondaire des jeunes filles en 1890, Armand Colin, 1891, p.13.
- (46) EMCHL, 80. ランソンはこの「文学史と社会学」(一九 四年)という論文において、デュルケムの方法を賞賛している。
- (47) EMCHL, 36.
- (48) Émile Durkheim, La science sociale et l'action, 1987, PUF, p.268.
- (49) La Revue des Deux Mondes, t.146e, 15-III-1898, p.428-446.
- (50) EMCHL, 473.
- (51) Voir la photographie de Gustave Lanson par Cl.Manuel, dans Larousse du XXe siècle, t.IV, pub. sur la dir. de Paul Augé, 1931, p.336.

2000年 8月 23日 水曜日 0:24 AM 下澤和義